



HB プロセス導入当時の思い出

『HB 導入の思い出』

(1) 市田さんが初の8時間制採用

史談会開催日

昭和45年(1970年) 9月26日

■ 語る人

中村 源一郎 氏
(中村製版所社長)

■ 【箱木一郎氏略歴】・

明治26年2月4日生。大正7年市田オフセット印刷会社に入社。昭和初めに凸版印刷に移り、以後製版部長、平版印刷部長、技師長、研究所長を歴任。昭和24年現在の中村製版所創立以来社長として現在に至る。

私は明治41年に大阪へ行き、近藤菱花先生につきまして、版のほうは習ったのです。油絵のほうは赤松燐作先生についた。

その後病気してしばらく遊んでいる時に、市田オフセット印刷の平尾さんから「来ないか」という話があり、そしてお世話になったのです。

その時分も市田オフセットも版画ばかりで、ポスターなども普通で13色でした。こみいったものになると、17、8色、20色がありました。

大正7年に市田さんと伊藤亮次先生がアメリカへ行って、HBの特許を買ってきたわけです。確か大正8年の7月に機械を運んできたと思います。そして、その年の9月頃から仕事を始めた。

当時第一番に仕事を始めたのは、レタッチでは私と竹沢真三さんと、牧田幸一さんの3人です。カメラが荒木綱夫さん、焼き付けが本庄忠雄さんその上に大沢さんがいたわけです。(不幸にして、あの当時第1回をやった人間は、私を残してみな死んでしまった)とにかく、最初は苦労しました。一番困ったのは、それまで写真は凸の写真をやっていたわけですが、ヨーカリンにするものですから、我々レタッチの人間にとって、実際のところわからない。自分の感でやるわけですが、なかなか上手く行かない。その点で苦労しました。

その後、大沢さんもアメリカから帰ってきて言ったんですが、ヨーカリンでなく銀メッキでやっていると言うので、銀メッキになってから大分助かりました。ヨーカリンではとにかくわからない。写真の専門家でも、まだまだ困難なやつをやっていたわけです。

焼き付けなどもやったことがあります。菊全の校正版でしたが、一晩中ガラガラ回しても液が上手くひけない時もありました。今から思えば滑稽ですが、とにかくやらなければしょうがなかった。月のうち日曜は定時で帰れるのですが、その間みな会社でカンヅメになってやっていました。2、3年経ってから大分調子がついてきました。それまでは夜昼の見境いがなかった。

紀元節の付録で中村不折の油絵をやったことがあります、あの頃一応目鼻がついたということで、会社から紅白の餅を配ったことがあります。

これは市田さんの人格からですが、印刷所へ行っても夜なんか紙を運ぶし最初のころは我々のところへ夜10時、11時頃きて、股火鉢にして、一緒になってワアワア話して、「やあ、御苦労さん」ということで帰るわけです。そして、よく出来た時は非常に喜んでくれるわけです。そういう方でした。

それから、8時間制も大正8年頃から市田さんが、印刷界で初めてやったわけです。印刷界の各方面から文句があったらしいですが、「自分のところの人間を自分がやるのを放っといてくれ、もし何なら私は脱会する」と言って、脱会してまでも日曜休みの8時間制をやり、しかも、今までの10時間代払っていたのを8時間に直してやったわけです。

それから、昭和7年頃東京の凸版へ来たわけですが、あの時分大きな会社の間で、盛んにマスクングだとか、平凹版だとかやかましく秘密でやっていたわけです。

そして徐々に平凹も、またマスクングはそれほどでなかったが、出来た。

それから、ワンショットカメラがはやりましたが、これでやればタッチなしで出来ると言うので、社長、重役たちは喜んだ。これを使って直ぐやれというのだが、実際は、原稿こしらえる前ならいいが、版としては完全なもの出来ないで苦労しました。やがてそれがわかりまして、ワンショットカメラを持ってきた人間は、自分から辞めました。

昭和12年に凸版が、アメリカの工場をモデルにして板橋工場を建設した。

昭和13年に出来上がり、その年の6月に私は板橋工場に転任になりました。半ば出来たところで仕事をやったわけです。一番困ったのは卵白で、汚れが出るので、HB入って以来、凸版に移っても初期のころ機械がみな止まってしまう、責められて困ったことがあります。



ました。とどのつまり、板橋工場へ移った初期に、感光液の配合によってそれを解決しました。

それから、板橋工場に技術部をこしらえまして、中田幾久治さんが大将で私が部長になって、方々の工場を観て歩いて、いろんな技術方面の相談をやったわけです。

昭和24年の9月に定年退職で凸版を辞めて、自分の小さな隠居仕事を始めたわけです。

そんなふうにして、今日になっているわけです。

<一口メモ>

HB プロセスについて

HB プロセスというのは、ドイツ系のアメリカ人、ウィリアム・ヒューブナーが考案した多色写真平版の製版法である。ヒューブナーは、1896年（明治29年）頃から写真を利用して多色の平版を製版する研究に没頭し、1908～9年頃に至り、在来の転写法の代わりに1枚のネガから、大型の版材に直接反復焼き付け、多面付きの刷り版を作るコンポーザー（殖版機）を考案した。まずHBカメラと称する特殊装置の大型暗室カメラを用いて、原稿から4枚の分解ネガを撮り、さらにそのネガから透かし撮りして、すりガラスにマゼンタ、シアン、黄、墨および2～3色の淡色用のポジを作る。これを原稿と対照してレタッチを加え、十分に修正してから、カメラでそれぞれ網ネガとする。この網ネガと感光液を塗布したジंक板とをHBコンポーザーに取り付け、あらかじめ作っておいたレイアウトに基づいて規定した位置に反復焼き付ける。この位置を決めるのはマイクロメーター付きのハンドルにより、1000分の1インチの精度を得ることが出来る。

東京写真製版工業協同組合発行の「写真製版工業史」より抜粋

